
アルマダ！

富士堂あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルマダ！

【Nコード】

N3795Z

【作者名】

富士堂あかり

【あらすじ】

ごく一般的…のはずの女子高生、椎名優はある日謎の男に渡された装置アルマダによって半ば強制的に変身してしまう。理不尽な要求をつきつけてくる飯島に怒鳴られながら優は悪の組織と戦うことに…

00*雨

気がつけば夢中で走り出していた。いや、逃げ出していた。

雨が酷く降っていた。臭い立つ悪臭が流れて欲しいと思いつつ全力で走る。向かう当てもなく。

呼吸が思うように出来ない。呼吸とは、なんだっただろうか。思い出せない、俺は、なんだ？誰なんだ！さっきまで、はっきり分かってたはずだ、俺は…

景色は驚くくらい速く変わっていった。まるで他人事のように感じた。悪い夢だ、そうであってほしい。そうでなければ困る。

何が困る？困ることなど何も無いではないか。しがらみから解放されたのだ。そうか、そうなのか？いや…

「嘘だ…」

通行人と目が合った

全身が総毛立つ。やめろ、違う、違う…

それは止める　　！

次の瞬間、俺の世界は再び赤に染まっていた。

何故、こんなことになってしまったのか。何故、彼女が死ななければならなかったのか。

あいつの言った意味が漸く理解できた。これは危険だ。しかし自分ひとりではどうすることも出来ない。方法を探さなければ・・・そして終らせなくては。でなければ彼女の元にはいけない。

暗雲の中、獣は風の様に光の中を駆け抜けた。

01*あんパン並びにヒゲ、そして

学校の床っていうのは走ることを前提に設計されていない。

「はっ・・・うう・・・っ！」

廊下を走ってはいけません、なんて念仏のように唱えられてるけどそれは優雅じゃない、とかマナーの問題なんかじゃない。とにかく滑る、危険なのだ。

普段から廊下を走っておけばよかった、と自分の真面目さを呪った。いや、真面目ちゃんかと聞かれたら迷わずいいえ、と答えるのだけ。残念ながら寝坊の類はしないただ、話がずれてしまった。さしあたっての問題。過去を気にしている時間はさらさらない。

「まったく…どうし、てっ！」

普通にグラウンドで走るのとは違う、上手く踏ん張れないし下手すりゃ転ぶ。けど今は安全に歩いていくことも転ぶことすら許されていない。

もし少しでもスピードを落としたり、もし転んだら……。心臓はばくばくしていて肺は裂けそうな位痛い。でも今は、とにかく走るしかないのだ。

耳にうるさい程の足の音、咆哮のようなそれを叫びながら化け物が

彼女の後ろにいた。

01: あんパン並びにヒゲ、そして

どうしてこんなことになったのか、話は少しばかり遡る。

「…っぐるああ待てええッ！」

「だから待てと言われて待つ馬鹿はいませーんっ！」

デジャブではなくて、（むしろ時間軸から考えたらあっちがデジャブだと思う）私は怪物に襲われる少し前、同じようにおっさんに追い掛けられていた。

放課後、学校の前のパン屋さんで買ったあんパンを頬張りながら帰宅中、突然目の前に現れた怪しいコートのおっさんに話がある、だなんて言われ最近変質者の類が学校周辺をうろついているという先生の話覚えていた私は素早く反対方向の道へと走り出した…がどういふ訳だか変質者さんの琴線に触れてしまったらしく（間違っても

「あっあああああ!？」

ずしゃ、とアスファルトを数メートル滑る。

痛い、一瞬の間の後、やばい、そう思うのとほぼ同時に背中に思い切り衝撃が加わった。

「いたっ! ちょ、何するんですかっ! どいて下さい!」

とりあえず可能な限り手足をばたつかせてみるがお腹を固定されてこちらは腹ばい。背中にいるであろう重しはびくともしない。

「くそ…手間掛けさせやがって…たく、しかしいくら使える奴がないからって女かよ…」

「はあ!? 意味わかんないんですけど! いきなり、追っかけてきて…はあっ」

背中に変質者が乗ってる。想像したくもない、と目をつむって、開く。頭に浮かぶのは最悪のケース、変質者に捕まった女の子は1誘拐される、2襲われる、3人身売買、4解体して内臓を売る…のどれかあるいはフルコース! 少なくとも1と2は必須な気がするけど、どうやらここで私の人生は終わってしまうようです。折角バイトしてお金溜めてたのにな、全部使っちゃえばよかった。

「…一週間後になってテレビでニュースになるんですね、行方不明の高校生、白骨化して見つかるって」

「…一応言っておくが俺はお前に用があつてこの町まで来たんだ。ついでに俺はお前に興味はさらさらないし間違つてもお前の考えるよーな下らないことをしにきたんじゃねえ」

「じゃあなんだって言うんですか、出会い頭に本気で追い掛けてきて、地面を転がった女子高生に劳いの言葉の一つも掛けない鬼畜な人は勿論そんなこと言つたら何か酷いことになりそうだったので少し考えてじゃあまず私の体から離れて下さい、そう言おうとしたその時、ぐい、と力強く襟元を引つ張られた。

ちょうど、体を起こしてやるように。

「こいつを使える奴を探しに来た」

そう言つて、男は私の目の前に黒い螺旋を突き付けたのだ。

何か、具体的に形容するにはあまりにも抽象的な形だった。

男の手からぶら下がるそれは鈍く光を吸収していた。黒く、光沢を持たずそれは金属なのだろうか。筒状のそれは折り重なった金属やら透明なガラスを納めていて一見秩序のないちぐはぐなオブジェのよう。しかし、少女はその奇妙な内臓を納めている螺旋状の黒に目を奪われた。

黒の筋が二つ、DNA螺旋を思わせるそれに何故だか心ひかれた。

「…おい、いつまで黙ってる」

ぱこ、男の呆れたような声と頭に残る緩い衝撃。頭が妙に冷静になってどいて下さい、と言ったが男が背中から離れる様子はない。

目の前の螺旋が姿を消した。

「…あっ！」

「あまり時間がないんだ。ここで話するのは都合が悪い」

「あーもう分かりましたからどいて下さいよ、腰痛になったらどうするんですか…」

酷いです、としよぼくれたような声を上げれば男の呻くような声、

不本意なようで、のろのろと背中を離れた。
少女もゆっくりと立ち上がる。少しその場に静止して不意にくるりと男の方を見た。

「全く、女子高生捕まえて馬乗りですか、重罪ですよ重罪！」

「仕方ないだろ！緊急なんだよ！」

ところでここ最近学校の周りで無差別に生徒に話しかけてたのは？と勢いのまま尋ねれば男が目を丸くする。少しだけしまった、とても言う様な顔をして広まってるのか、と歯切れ悪い台詞にホームルームで注意されましたよ、スカートの埃を払いながら言つと男はそれきり黙った。

「でも私が聞いたのはマスクした男って、あ、あとなんで他の生徒でもなく私なんですか？それとそれ！黒いの、なんなんですか、私が見えるって「だあっ！だからここで話すのは色々とまずいんだ！」・・・じゃあ話を聞いて差し上げますので何か奢って下さい、ね？」

「っ、わあつたよ、大人しくしてろよ・・・だからガキは嫌いなんだ・・・」

「はい！でもこんな歳が離れてたらカップルじゃなくて親子です
ね、」

「おまつ」

ドオオオオオオツ！！

瞬間。男の表情が険しくなったのに気が付くことはなかった。男の怒号も彼女の耳に届くことはなかったのだ。

地響きにも似たそれ。激しい爆発音が辺りに響き渡る。

見えたのは自分と同じく呆然と目を見開く男の姿だった。

「が、学校だ…何、ばくはつ？え…実験室かな、すみません！ちよつと見てきます！」

「あ、おいつ待て！」

男が再びシャツを掴んだ。なんですか、と振り向けば酷く苦々しく表情を曇らせた男。

「…これを持ってけ」

「は？」

「持ってけ！」

「は、はい…？それじゃ、ちよつと行ってきます」

腕を掴まれ強引に先ほどのそれを握らされる。真意は分からなかったがとにかく今は学校に行かないといけない。少女は受け取った筒

を握り締めて校門の方へと走って行った。

そろそろと正門を通る。この時間は生徒は皆帰ってる時間だ。誰もいないグラウンドは西日で赤く染まっている。爆発音がしたのだ、もし誰もいなければ自分が警察か何かに連絡しなければならぬ。音のしたであるう方を見て、言葉を失った。

壁が壊れてる。

校庭の端、塀が一部分だけ途切れていた。白い塊が彼方に散らばっている。先ほどの衝撃音はこれのせいか、大きく空いた穴は小さな車には余る大きさ。交通事故ならそうで質が悪い。誰も怪我してないからいいものを、轢き逃げと変わらないじゃないか、と携帯を構えながらふと、言いようのない違和感。

何か変だ、と漠然に思うものの何がおかしいのか、歩み寄り、瓦礫の山、しゃがみ込んだ刹那再びの爆音に思わず叫び上がった。

そしてその違和感の正体と原因を瞬時に理解した。

校舎の近く、コンクリートがえぐれている。そこには自分の何倍もありそうな大きな化け物が、こちらに視線を向けて立っていた。

瓦礫の山、タイヤの跡があるべき場所にあったのは無数の窪み。否、その窪みの持ち主が今私を見る。

「うばあぁ ああぁ ああ！！！」

「　　つうわあああああああ！！！！！」

頭が真っ白になった。なんだあれは、なんだあれは！？

化け物、と形容する以外にいい言葉は彼女の混乱した頭の中には存在しなかった。咆哮を響かせるその怪物は遠くで自身がここに入り込んだ所でうごめく小さな存在に気が付いたのだ。どしん、どしんと地を鳴らしながらそれはどんどん近づいてくる。

「うばあぁあぁあぁ！！！！いいい」所にきた、なああぁ　っ！何もなくて退屈してたところだあぁあぁ　・・・」

「・・・ひっ、いや・・・いやあぁあぁあぁっ！！！」

震える体を制止して校舎に向かって走り出す。背中を向けてはダメだと直感で思った。追いかけてこなら確実に負ける。校庭の周りは高い塀で囲まれてる。登って外に逃げ出すのも上手くいきそうになり。かといって横に走るのも危ない。そうして彼女は一見して最も危険だと思われる方向へと走り出していた。怪物は獲物が自分から殺されにきたのだらう、赤い幾つもの目をぎらつかせて笑い出した。近づくほど奴が異常なほどでかい図体をしているのがひしひしと感じられた。そしてどんどん加速していることも。

そしてその時を待っていた、怪物が最も冷静さを失っている時を、自分が最も集中してる時を。

「うおおおおあああゝっ！！！！」

今だ！少女は踏み切り、体を回転させる。大きく一步を取った。そして獣の影が自分を覆った時に思い切り真横に体ごと飛び込んだのであった。

一瞬の出来事がコマ送りのように酷く長く感じた。上手く受身を取って素早く立ち上がる。ちらりと横目をやれば怪物は遠ざかっている。重いものを動かすのにはより大きな力が必要、止めるのにもそれ相応の力が必要。加速が止めばまた一からやり直しなのだ、

「ぬゝおおおっ！！小娘ええゝ舐めやがっでえええええッ！！」

「っ！！！！早く逃げなきゃ・・・いや、これ、外に出してもやばいっ！！！！」

獣が再び運動を始めたのを背に感じながら考える。近くはすぐ民家だしあのデカブツがどこから来たのは分からないが町に放すのはあまりにも危険すぎる。

自分のこの危機的判断能力を疑いながらも気が付けば校舎に向かっていた。

足音が迫っている。ローファーマのまま校内に入り込む。

「までえええええ小娘えええええ　っ！！ぶちコロスウウ！！」

「っ！ああもうしょうがない！殺してみたりや捕まえてみるからねこのウスノロ！！女に追いつけないなんてだっさい牛さん！！」

言い切るより早くひときわでかい叫び声に耳がいかれそうになる。さあ、もう後には引けない。尊大なネズミは命がけだ。でも、きつと方法がある。そう思わずにはやっけてられなかった。

（・・・そうだ、屋上から落とそう！さっきみたくやれば・・・）

「おおあああああ　っ！！！！もう逃げられねえぞおおおっ！！」

「・・・っ！？うわあああっ！！」

いくら狭いからと言ってあなどっていた。怪物の言葉を聞くまで近

くまで来てることなんて気が付かなかった。恐怖に足がすくみ地面に投げ出される。

怪物とにらみ合いながら後ずさる。どすん、どすんと怪物が進む。

壁に触れながら、手が沈む。一人一人入れるくらいの狭い横道。確かに建設の時間違つて作っちゃったとか・たまに馬鹿な男子たちが入って遊んでいるのを見たことがある。

少しでも長く生き延びたかったからであろうか、怪物の終わりだ、という台詞を聞いた瞬間そこに入り込んでいた。三メートルくらいある。胸が悶えたがなんとか奥に入り込む。

「ぐへへっ、本当にネズミみでえだなあ・・・」

「・・・っ」

だが後は詰めてくれただけ。怪物は悪臭を放ちながら叫び、唾液を飛ばしながらその狭い穴を広げていく。がりがりコンクリートを崩していく音、すれすれまで迫っている獣の腕。

もう何処にも逃げられないではないか、どうして私なの。何も悪いことなんかしてないじゃないか。

さようなら、色々ごめんなさい、にじみかけた涙を堪えて崩れそうになる、刹那。

『ACTIVATE TYPE ARMED』

機械の音がした。
時間が止まったような、それくらいその音は私の頭の中ではつきりと聞こえた。

走馬灯のようなものか、はたまたそれが文字通り私の頭に響いたものなのか、とにかく私は何が起きたか分からなかった。片足がおかしい。膝より少し上から何か機械のようなもので覆われている。これはまるで…

「おゝんなあああゝっ！ぶっ殺してやるゝうううう！！」

「っ！」

選択肢など存在しなかった。

力の限り足を振り上げたのと時を同じくして物凄い衝撃に私は壁に打ち付けられた。

02*アルマダ、或いは不法侵入

今日一番の衝撃だ、と煙の沈み始めた頃に立ち上がって外へと顔を出した。

廊下は窪地から放射状に爪あとを刻んでいた。怪物が受け止めたからかあまり被害は大きくはなかったが。

ぐったりと地面に倒れこんだ様子を見るとさっきの衝撃で伸びてしまったらしい。死んだのかどうかは分からないしあまり近くに居たくはなかったので伸びているのを確認し颯爽とその場を立ち去った。学校にいた理由は分からないがあのだ分じゃ退屈しのぎだったと思える。

大きな牛の角に無数の赤い目、体軀は数メートル、異常に強い力を持っている。あまり頭はよくないようだがあんなものを野放しにしている筈がない。

そして自分の身に起きたことも、だ。化け物をノックアウトしたあの現象。何が起きたかよくは分からなかったが、とにかく私の身にも不可解なことが起こっている。

あまりにもいっぺんに不可解なことが起き過ぎてどうしたらいいか、そんな悩みは疲れと空気を読まずに鳴るお腹の音で一遍に吹っ飛んでいった。

02：アルマダ、或いは不法侵入

「ふーっ、っ、か、れ、たあー」

これじゃ明日は全身筋肉痛だな、と暖かい湯につかりながら思い切り体を伸ばす。食べた後すぐお風呂に入ると消化によくないって聞いたことがあるけど知ったものか、とにかく今日は疲れた。

薄緑色の湯に体を沈めていく。息が泡となって波面を揺らす。溜息をつく、今だ頭はショートしたままだ。

「明日も学校だけどうなるんだろう・・・地方紙に載るくらいのもニューズだよ、警察も来るのかな・・・ってかあれ、伸びたまま置いてきちゃったけど大丈夫かな・・・なんか不安になってきた・・・」

「・・・ってか冷静に考えればなんでさっさと逃げなかったんだろ・・・闘牛士じゃないんだから」

「けどなーんで私のほかに誰もいなかったんだろ・・・あーもう、なんかむかつく」

入浴剤の甘い香りが鼻をくすぐる。とにかく今日は早く寝よう。こんな変なことがあって溜まるか。よくよく考えれば不可解なことが多すぎる。きつと夢に違いない、それならばそろそろ覚めてもいい時間だ。そうでなければ別の夢にこんにちは、悪夢は記憶の彼方になる、はず

「残念ながら夢オチじゃねーからな」

がらりと窓が開いて夕方の男が再び登場した。

気が付けば男の頭はぐしゃぐしゃになっていた。自分の手には桶である。

誰がどうみても私が水をぶっかけた以外説明しないだろう。濡れ鼠になった男は怒っているのか、呆れているのか、微妙な表情。

「・・・お前なあ・・・！」

「いやいやいやおかしいでしょ！何処の世界に女子の入浴シーンに生真面目な顔して入ってくる馬鹿がいるんですか！のびた君か！」

「だからガキに興味はないつつつただる馬鹿が！追いかけてこの次は水か、あの後お前帰ってこなかっただろ、だから心配してやったつーのに・・・」

なんで私の家の住所知って、と零せば大人の世界には色々ある、と謎の台詞で濁される。この人、やっぱり危ない感じの人っぽいな、と男を睨んだ。

いくら興味ない、って言われても見られるのは癪だ、そう思い立ち上がった窓に手を掛ければ冷たい風に身震いする。

「俺の気持ちがあつたか」

「寒い・・・」

「こっちは倍さみーんだよ！とにかくあの後どうした学校は何もな

「かったのか？」

「えっ、それは・・・あの・・・」

「？」

どうしたって、そう口にして涙が出てきた。怖がって泣く暇なんて無かったのだから。

男のうるたえる声が聞こえた気がしたが時間遅れの涙は止まらず、ぐずぐずになりながら怖かったです、となんとか言葉にした。

のぞきじゃない、と風呂場までやってきたそのどこからどう見ても怪しい男はどういう訳か、濡れた髪を黙って撫でていた。本当は優しい人なのかも知れない、まだ、よく分からないけど。

「・・・っ、すみません、風邪、引いちゃいますよね」

「・・・お前が無理そうなら、少しは待ってやるが」

「あの、話、するって、言ったじゃないですか・・・部屋、二階なんです上で待っててください。すぐ、あがりますから・・・」

「・・・ちよ、」

「窓の開いてる方です、とりあえず、少し聞かせてください・・・もう、訳が分からなくて」

「いや・・・すまん、ちょっと」

「？あ、タオル欲しいですか。い、今持ってきます・・・」

そうじゃなくて、壁を登っていけってことなのか、と渋い顔で言われてああ、と少女は声を漏らしたのだった。

さて、とタオルを被った男が言った。

「その様子じゃ実際に見たようだから説明できることは説明するが、よく帰ってこれたな」

「あれは・・・一体、なんなんですか」

あの時校庭で見た怪物。ありえない、と先ほどまで否定してた自分がいたはずなのに。

男は唸って、顎を擦った。

「一言で言うと難しいが・・・名前は分らん。正体も知れたもんじゃねえが・・・とにかくあれは、いや、あいつらは紛れも無い怪物で楽しみで人を殺しちゃうよーな奴らだ、まともなもんじゃねえ」

「・・・あいつらってことはあの牛以外にもいるってことですか」

「残念ながら敵は軍団だ。数日前この町に来てるっつータレコミを貰った「ちよつと待って！それ、他にも協力者がいるってことですか？」・・・まあ、協力者といえばそうかな。あいつらを止めるために協力してくれてる仲間はある・・・がこうやって俺みたいに

実際に動いてる奴はいない」

確かに、あれと面と向かって戦おうなんて思う人はいないと思える。私だってもうあんなの近くにすら行きたくはないのだ。

「ところでお前に渡した奴。あれちゃんと持つてるか？」

「え、ああ・・・！そうだ、あの、私、あれに追っかけられてるときにいきなり、機械？みたいなのが・・・よく分からないんですけど足が変化して」

少女のたどたどしい説明に男は目を丸くした。驚き、そしてそれは感心したようなそれへと変化していった。

「そうか、いや見立て通りといえばそうだが・・・まさか使い方も教えずに発動させるとは・・・」

「ちょ、ちょっと！やっぱりあれ、これのせいなんですか？いきなりのごとで、よく」

「それは足だけ、か？」

言葉を遮られる。そうです、と一言返せばやってみる、と差し出したそれを付き返される。やってみる？どうしてああなったかも分かっていないような自分に何を言ってるのだろうか。この人は無理をいいすぎなんじゃないか、と恨めしげに見ていれば気が付いたのか、渋い顔をされて、気合を入れてみる、とまたまた無茶な質問。

「あ・・・お前、なんかスポーツやってんだろ、その時に、なんでもいいから集中するために毎回やってることとかないか。それがな

ければ目を閉じてそれに同調するように意識を集中しろ」

「無茶ばかり・・・いきますよ、あ、失敗しても何も言わない
てくださいね。っーかやり方知ってるならさっさと教えてくれたっ
ていいのに」

黙って集中しろ、と男が言う。ゆっくりと目を閉じて掌のそれに集
中する。冷たくて、不思議な感触だ。握り締めて、掌の感覚に集中
する。暖かくなってる気がする。いや、確かに熱い。

熱くはなっているが、あのとさどうやって変身したかなんて覚えて
ない。何も変な感じはしていない。部屋の中は沈黙に包まれていて
こちらを見ているであろう男の視線を想像してむずがゆく感じた。
もういいですか、無理そう、と返事も聞かないで目を開けて、不敵
に笑う男の顔と・・・そして体を覆う違和感に私の世界は再び時を
止めた。

体中を何かが覆っている。視力は悪くないほうだがよりくつきりし
ている。マスクのようなものを被っていて中からではよく分からな
いが、恐る恐る掌を上げればあの時見たそれにそっくりの二本のグ
ローブに覆われた腕が視界に入っていた。

「どうだ、初めて変身した気分は」

「え・・・これ、私、今どうなってるんですか、何これ！」

「落ち着け。あんまり暴れると床が抜けるぞ！しかし、くく、これ
が偶然じゃないってことはなかなかいいじゃないか！！いいか、椎
名、今お前の体はアルマダで強化されてる。俺たちが持つ最大の力
を持ったそれにな！アルマダは単なるオブジェじゃない・・・対怪
物用のボディスーツだ。そして・・・まあみてみりゃ分かるが、お

前はこいつを使える数少ない適応者」

「ちょ、つまり・・・私はこれで、怪物を倒したってことですか。これ、あの、私、変身ヒーローの類に変身してるってことですかあぁ！！？」

「そうだ、ま、あんなちゃちなもんじゃないが・・・とにかくお前さんにはこれから俺に協力してあの怪物たちと戦って貰う。被害が出る前に食い止めるのが俺達の仕事だ、いいか？」

アルマダ、と男が言った。この筒の名前だろうか。

掌から筒は消えていた。腰のベルトに筒だったものが電子光を放ちながらついている。

もし断つたら、その言葉に男は言う。お前が想像できる最悪のケースになる、と。

戸惑った、しかし、断れる気がしなかった。ゆっくりと頭を縦に振ればにやりと笑って男が掌を差し出す。

「俺の名前は飯島英二、お前のサポートをしてやる。お前も・・・応名乗つとかなきゃ気持ち悪いだろ？」

「・・・しいな、椎名優です」

「よし、それじゃあこれからよろしく頼むぞ」

「が、頑張ります・・・飯島さん、よろしくおねがいます」

「ちょっと待て、さっき怪物を倒したつつつたよな」

飯島さんの視線が痛い。何かまずいことを言っただろうか。だから

キックしたら気絶しちゃいました、そういきった瞬間飯島さんのグーパンが私の頭ごとマスクを揺らしたのであった。

「ひ、酷いです飯島さん……いきなり、ぶつなんてっ！」

「うるせえ!! どうして止めを刺さなかったんだよっ! まさか学校においてきたのか!! 今すぐ行くぞ!!」

「え、もうパジャマなんですけど……」口答えすんじゃないえええええ!!」「ひいっ! わ、分かりましたあ……っ!」

残念ながら私のお話はこれからだっただけです。女の子はスカートを履いた魔法少女になるものだと思っていたのですがどうやら私の場合は違っただけで、少し怖いおじさんに言われるまま

残念ながら学校はぼろぼろのまま怪物の姿はなかった。私は正直よかったですと思ってるけどまたグーパンを食らったのは不本意でしたけど。とにかく本当にこれが始まりのようです。私、今日からヒーローになりました。

何処の暗闇か、ただっ広く何にもない場所がそこにはあった。

いや、何も無い、というのは少々語弊がある。その、酷く暗い空間の中、それは居た。

「随分と見苦しい真似をして下さいましたね」

部屋の中、ひときわでかい図体のそれに向かって男が言った。毛む

くじやらの体からは立派な角が生えているが酷く汚れている。ところどころ血が滲んでいて彼の体臭と交わって酷い悪臭を放っていた。

「うづうづう、いきなりのごとで、ぐうづう」

「やはり貴方を自由にするのは間違いのようですね・・・現段階ではなるべく事は隠密に、と閣下のご命令です。次失敗したらどうなるか・・・クククツ」

男の笑い声にびくりと毛の塊が怯える。体躯の差は明らかなのに、獣は見るからに怯えていた。男の笑い声に釣られて他の笑い声が混じる。其中で一人、腕を組んで一部始終を見てる別の男が居た。

「ギルスティン、ビークを責めるな。ビークも悪趣味なことばかりやってるからそうなるのだ、遊びでやってるんじゃない」

其の言葉に獣は再び身を縮こませる。先ほどまでそれを誇っていた男はごきりと首を回して大げさに手を広げてそうして暗がりに向かって歩みを進めた。

「おっと、私はその点に関しては貴方に賛同は出来ませんね。堅物のオウズウェル殿、少しなりとも楽しんではいりませんか・・・？」

「・・・やりたければ勝手にやれ、私は責任は取らんからな」

獣は男が暗闇の中で消えるまでじっと見ていた。瞳に怯えの念はなかった。かわりにそこには獲物を見たときに見せるぎらぎらとした赤黒い意志があった。

「ぜっだいに・・・次はぶっ殺しでやるうゝ・・・!!」

次は期待している、そういうも既に外の音など聞こえていないようだ。ずんずんと小うるさい音を立てながらビークもまた暗がりへと消えた。

考える、奴を好き勝手させたのは確かに失敗であった・・・が、ビークを一撃で倒した者とは一体何者なのであるうか。今まで自分達にまともに反抗できたものなど皆無と言っていい。恐らく不意をつかれたのであるうがしかし、放って置いていい案件ではなさそうである。計画の邪魔になる可能性はなるべく早く消したほうがいい。早急に手を打たねば、と男は重い闇の中へと姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3795z/>

アルマダ！

2011年12月14日17時51分発行